

佐佐木信綱

佐佐木幸綱 著

# 佐佐木信綱

佐佐木幸綱 著

短歌シリーズ・人と作品 2

---

佐佐木幸綱 (ささき ゆきつな)

歌人。1938年東京生まれ。1966年早稲田大学大学院修士課程卒業後河出書房に入社、「文芸」編集長を経て1970年退社。現在、跡見女子大学助教授、早稲田大学講師。歌誌「心の花」編集長、現代歌人協会理事。

主著に、評論集『萬葉へ』『極北の声』『中世の歌人たち』『小倉百人一首』『詩の此岸』『底より歌え』『柿本人麻呂ノート』などがある。

歌集に『群黎』『直立せよ一行の詩』『夏の鏡』『火を運ぶ』がある。

短歌シリーズ 人と作品 2	佐佐木信綱
発行所 株式会社 桜楓社 東京都千代田区猿樂町二一八―十三 電話 二九五―八七七一(代) 振替 東京六一―八〇二〇	著者 佐佐木幸綱 発行者 今井肇 印刷所 共信社印刷所
	昭和五十七年六月二十日 初版印刷 昭和五十七年六月三十日 初版発行
	定価 一八〇〇円

目

次

序

作家研究編

- 一、生い立ち・幼年時代……………九  
遺詠中の西行…九 父弘綱と母光子…二 幼年時の信綱と父弘綱…二四
- 二、「心の花」創刊まで……………二四  
東京へ…二四 東京大学文学部古典科に入学…二六 長歌改良論をめぐって…三三 『日本歌学全書』の刊行、父母の死…三六 「いささ川」創刊…三六 「心の花」創刊…四二
- 三、『思草』刊行まで……………四六  
短歌革新運動期の「心の花」…四六 揺れる「心の花」と信綱…四八 信綱の立場…五二 遅すぎた歌集『思草』…五三 『思草』について…五五
- 四、『新月』前後……………五九  
「おのがじし」…五九 「あけぼの会」…六〇 観潮楼歌会…六三

本郷西片町へ…三 東京帝大講師となる…四 『新月』の刊行

…七

五、『常盤木』前後……………七三

「心の花叢書」の刊行…七三 『常盤木』の刊行…七三 『常盤木』

の世界…七三 『校本万葉集』の完成…七三 『琴歌譜』 『承德本

古謡集』の発見…七三

六、『豊旗雲』『鶯』の時代……………八二

「心の花」新旧世代の交替…八二 『契沖全集』刊行と『定家所

伝本金槐和歌集』の発見…八四 『豊旗雲』の世界…八五 ひろく、

深く、おのがじしに…九一 『鶯』の世界…九三

七、『椎の木』『瀬の音』の時代……………九七

戦時の信綱…九七 『椎の木』『瀬の音』の世界…一〇〇 生活的背

景…一〇三 千亦、昌綱の死…一〇四

八、『山と水と』の時代……………一〇六

熱海西山への転居…一〇六 敗戦、そして『黎明』の刊行…一〇七

妻雪子の死…一〇八 『評釈万葉集』の刊行…一〇九 『山と水と』

九、晩年

自伝三部作…二二三  
西行への敬慕…二二七  
へ一人を生き、へ行く人を生きる…二二五

秀歌鑑賞編

- 鳥の声水のひびきに (二三)
- かぜにゆらく凌霄花 (二四)
- 地の底三千尺の (二五)
- 願はくはわれ春風に (二六)
- いささかのよき事なして (二七)
- 幼きは幼きどちの (二八)
- 巫細巫の地図色いかならむ (二九)
- 春の日の夕べさすがに (三〇)
- わた中のかかる島にも (三一)
- 大門のいしずゑ苔に (三二)
- 山高きみ寺のうちに (三三)
- 北の海の千尋高波 (三四)
- 山の端に月はのぼりぬ (三五)
- ふしながら見ましし去年の (三六)
- 天にいますわが父のみは (三七)
- 雁ひと列江をよこざりて (三八)
- 月のぼれり千里洞庭の (三九)
- かたりことり小車はゆく (四〇)
- 野の末を移住民など (四一)
- 芝の上に投げし煙草の (四二)
- 大いなる荷物背負ひて (四三)
- 春の日のゆくらゆくらと (四四)
- 春の日は手斧に光り (四五)
- ほほゑめばはつかに見ゆる (四六)
- 氷りたる水田にうつる (四七)
- よき事に終のありと (四八)

ぼっかりと月のぼる時 (一四)

我が行くは憶良の家に (一五)

ゆく秋の大和の国の (一五)

まつしぐら駒走らして (一五)

階下の室にけたたましうも (一五)

万葉集卷二十五を (一五)

現実の暴露のいたみ (一五)

人の世はめでたし朝の (一五)

ゆく春の丹雲うつろふ (一五)

うぶすなの秋の祭も (一五)

生ける文字か死せる文字かも (一五)

いつまでか此のたそがれの (一六)

骰子は落ちぬわれ勝ちたりと (一六)

病みふせる一日のながさ (一六)

道の上に残らむ跡は (一六)

おん頬はかそかに匂ふ (一六)

雲しづむ夕牧のはてに (一六)

湖岸をはなれて少し (一六)

山の上にたてりて久し (一六)

人とはくゆきて帰らず (一六)

からうじてわがものとなりし (一六)

くもり空ゆふ山かげの (一七)

きさらぎの七日のよるの (一七)

月おぼろに外湯を帰る (一七)

自転車おり片手額の (一七)

白雲は空に浮べり (一七)

とまれるにはげしくしなふ (一七)

心ゆことほぐ我は、 (一七)

五月かぜ朝野をわたる (一七)

朝舌にをどみのこれる (一七)

真青淵日の照つよし (一七)

堤おりし二人の童子 (一七)

山にありて山の心と (一七)

二本の柿の木の間の (一七)

川中の大き一つ岩 (一七)

正月の五日の昼の (一七)

日がさせば目の前に舞ふ (一七)

月くもれり燈火管制の (一七)

國今し戦へるなり (一七)



深夜今し敵前にあらむ

(二八)

夜に入りて寒となりぬ

(二九)

少女なれば諸類につけし

(三〇)

湖遠の二並山の

(三一)

熱ばめる目をとぢてをり

(三二)

わが世に又あひがたき

(三三)

海つ物柳葉魚小竹に

(三四)

キルンゆなだれおちおつる

(三五)

どつちにある、こつちといへば

(三六)

春ここに生るる朝の

(三七)

月の色と水の光と

(三八)

縋衣の袖に夜の山の氣

(三九)

磯畑は花さきのこる

(四〇)

もやの底に花さきしづむ

(四一)

心もえて開幕の時刻を

(四二)

荒海をむしろよろこびて

(四三)

指のかげ壁にうつして

(四四)

青き家を出でくる童

(四五)

思ひは思ひを生み

(四六)

ものぐさのあるじ信綱

(四七)

人いづら吾がかげ一つ

(四八)

呼べど呼べど遠山彦の

(四九)

こたへ歌えせず石麻呂が

(五〇)

ひたくだる水のたぎちの

(五一)

揖斐長良二つの大河

(五二)

竹群のかげに枯葉を

(五三)

悲願あり明日の命を

(五四)

人いゆき帰りこなくに

(五五)

何すとして執ねくもかく

(五六)

七宝嚴飾の塔は焼きつる、

(五七)

花さきみのらむは知らず

(五八)

一日いきば一日の命の

(五九)

柿落葉はつゝのこる

(六〇)

ありがたし今日の一日も

(六一)

西上人長明大人の

(六二)

作品選……………三三

参考文献……………二四三

佐佐木信綱略年譜……………二四四

短歌索引……………二七三

装画 佐藤多持

作  
家  
研  
究  
編



## 一、生い立ち・幼年時代

### 1 遺詠中の西行

佐佐木信綱は、明治五年（一八七二）六月三日、伊勢国鈴鹿郡石薬師村（現、三重県鈴鹿市石薬師町）に生れ、昭和三十八年（一九六三）十二月二日に熱海西山で没した。満九十一歳、数え年九十二歳まで、明治、大正、昭和の三代を生き抜いた歌人、国文学者であった。

信綱が生きた明治初年から昭和三十年代までという時代は、歴史的に見て、近代、現代日本の激動の時代であった。開国、明治維新を経て、世界の列強に並すべく、富国強兵のローガシをもつて資本主義、帝国主義社会の充実をはかった時代、その命運を賭けて、第一次世界大戦、第二次世界大戦に参戦した時代、そして敗戦につづく戦後の混乱と復興、高度経済成長の時代。

この激動の時代を、時代の波に押し消されることなく、とにかく自分自身を生きようとした、これが佐佐木信綱の終生のテーマであった。こんにちの私たちが、信綱という歌人を単なる過去への感傷としてでなく振り返りみる意欲を持つのはこの一点に注目するからであって、それ以外ではない。この点をまず確認しておきたいと思う。

信綱には、遺詠三首がある。その中の一首をまず引いておこう。

西上人長明大人の山ごもりいかなりけむ年のゆふべに思ふ

この歌は、後の「鑑賞編」でも取り上げるつもりであるが、信綱の長い生涯のピリオドをなす歌として象徴的である。西行も鴨長明も、激動の時代に生れつつ自分を守り生きようとした人々である。西行は出家して、吉野、伊勢、熊野、高野等の山中で自然を友として日を送った。長明は日野の外山に方丈の庵を結んだ。その彼らの山中の「一人」を作者はいま思っている。

信綱は、昭和十九年十二月に、東京から熱海西山の山荘に移住した。同二十三年十月、妻雪子と死別。以降は看護婦や食事の世話、身の回りの世話をする女性はいたが、孤独な山住みの生活を送っていた。とくに、同三十三年以降は、膝の関節炎のため歩行不可能となり、ほとんど外出することもできなかった。西行、長明の「山ごもり」の生活に寄せる思いは、このような自身の生活を省ての思いでもあったろう。が、根底のところには、激動の時代のただ中で自身を生ききろうとした者の、それゆえに負わなければならなかった深い孤独を共有する者としての静かな共感があったはずである。

なかんずく、西行への敬慕は深かった。信綱における西行の問題はのちに詳しく触れることにするが、幼少時に父弘綱から受けた影響が大きかった。弘綱は息子の信綱に歌人としての英才教育をほどこすわけだが、まず、万葉集と西行からはじめたらしい。信綱の自筆年譜『佐佐木信綱文集』所収に、次のようにある。

《明治九年（五歳）この年、父より万葉集、山家集の古歌の誦誦を授けられる。》。

五歳といっても、数え年五歳である。意味的な理解、文学史的な把握といったことはとても無理であって、ひびきや調べのよい歌を文字通り誦読させたのであろう。その中に『山家集』があった。信綱の生涯において、このことの意味は大きかった。信綱は、折に触れて西行を思う歌をつくっている。また、日本歌学全書第七篇(明24)に『山家集』を入れたのははじめ、岩波文庫『新選山家集』(昭3)、『西行上人歌集』(昭4)、『西行全集』(昭16)、岩波文庫『新訂山家集』(昭32)と、都合五度にわたって校訂作業を行ってもいる。

『山家集』の誦読と遺詠に登場する「西上人」、信綱の出発と終焉に西行がいたことに私は注目する。そして、その出発が九十一年の生涯を決定づけたことの運命的な重さに思いを及ぼすのである。

## 2 父弘綱と母光子

信綱が生れた明治五年(一八七二)という年は、太陽暦が採用された年、新橋、横浜間に鉄道が開通した年である。同年生れの文学関係者には、島崎藤村、樋口一葉、岡本綺堂らがいる。

歌人と比較すれば、落合直文より十一歳、正岡子規より五歳年下、与謝野鉄幹より一歳年上である。直文も、子規も、鉄幹も、和歌革新運動の推進者であった。信綱もまた、短歌史の屈接点と青春時とがいくわす、そういう時期に生れ合わせたのであった。

三重県鈴鹿市石薬師町にある信綱の生家は、現在、「佐佐木信綱記念館」として、保存、公開されている。所蔵リストが私の手元にないので詳細を書くわけにはゆかないが、机、硯、筆、

万年筆、眼鏡等の遺愛の品、信綱をはじめ、父弘綱らの筆跡、信綱あての書翰等、あるいは信綱蔵書のうちの近代、現代の歌集歌書の類が収められている。(注1)

木造瓦ぶき、二階建てで、六十坪弱。旧東海道である道路に面した窓には木の格子がずっと入っている家で、ほとんど当時のままだそうである。(注2)

「佐佐木信綱記念館」が開館したのは昭和四十五年十二月十二日、私は開館式に出席し、はじめこの家を見た。その折の印象を次のように記している。

《安藤広重の東海道五十三次の中に石薬師駅本陣の絵があるように、かつては街道筋の村として栄えたところだが、今は交通の便が悪く、それゆえ、ひっそりとした静かな町であった。記念館となった信綱の生家はそれほど広くはないが、太いがっしりとした木で造られた二階建ての家で、古い日本家屋独得のうっすらとした暗さを室内に充滿させていた。急な、梯子と呼んだ方がふさわしい二階への階段が印象的であった。》(「非断絶の苦惱」「底より歌え」所収)。

信綱の父弘綱は文政十一年(一八二八)七月十六日、佐々木徳綱(のりつな)の三男として生れた。(注3)幼名を習之助といった。徳綱は「児島」という号を持ち、書と歌に秀れた人物だったといふことだが、弘綱が七歳の年に死去。以後は母鳩子の手で育てられた。長男陽綱(あきつな)はすでに医師として独立していたが(次男は早逝)、弘綱をかかえての鳩子の生活は楽ではなかったらしく、「朝夕に桑こきたれて子のためにこがひ糸くり暇な的身や」との歌が残っている(「こがひ」は「蚕飼ひ」の意)。鳩子は、きわめて教育熱心な母だったらしい。

弘化四年(一八四七)、母のすすめもあって、二十歳の弘綱は足代弘訓(あじろひろのり)の寛居塾(ゆたな)に入門する。



弘訓は本居春庭に語学を、大平に歌を学び、伊勢山田の碩学として聞こえた人物で、多くの門人を擁していた。弘綱(当時は習之助)は、この弘訓に信頼された。弘訓の「弘」を譲られて弘綱と名を改め、在学四年で塾頭となった。本格的な学問と歌とは、この寛居塾で学びはじめられたのであった。

安政四年(一八五七)、弘綱ははじめて江戸に上る。下田奉行とハリスとによって「下田条約」が結ばれた年である。弘綱は江戸で、江戸派の歌人井上文雄を知り、さらにははじめて自著を公刊するきっかけを得た。『竹取物語俚言解』である。激動の時代にあつて自分の道を生きることの意味を見出しただろう点で、さらには、広く世の歌人、学者と交流をするきっかけとなった点で、この江戸行きは、弘綱の一生の中で小さからぬ意味を持ったようである。江戸滞在は九ヶ月にわたった。帰郷後、各地の歌人、国学者を訊ねて信楽、奈良、河内、大阪、京都等を旅した。伴林光平、萩原広道、中島広足、河本延之、渡忠秋、福羽美静らとこの間に知り合い、弘綱の名も次第に広く知られるようになっていった。

江戸に上る前、安政元年(一八五四)に、二十七歳の弘綱は園田庄兵衛の娘須磨子と結婚し、翌年長女けい子をもうけた。けい子は幼いころから歌をつくり(佐佐木信綱記念館)には彼女の短冊が残っている)、弘綱はこのはじめての子に文学的な面での期待を持ったりもしたらしいが、この子は八歳で死去してしまう。文久三年(一八六三)のことである。

時代は明治となる。明治二年(一八六九)一月に母鳩子が死去、翌三年に妻須磨子も相次いで死去した。信綱の母となる光子を後妻に迎えたのは同年の暮、弘綱四十二歳の折のことであつ